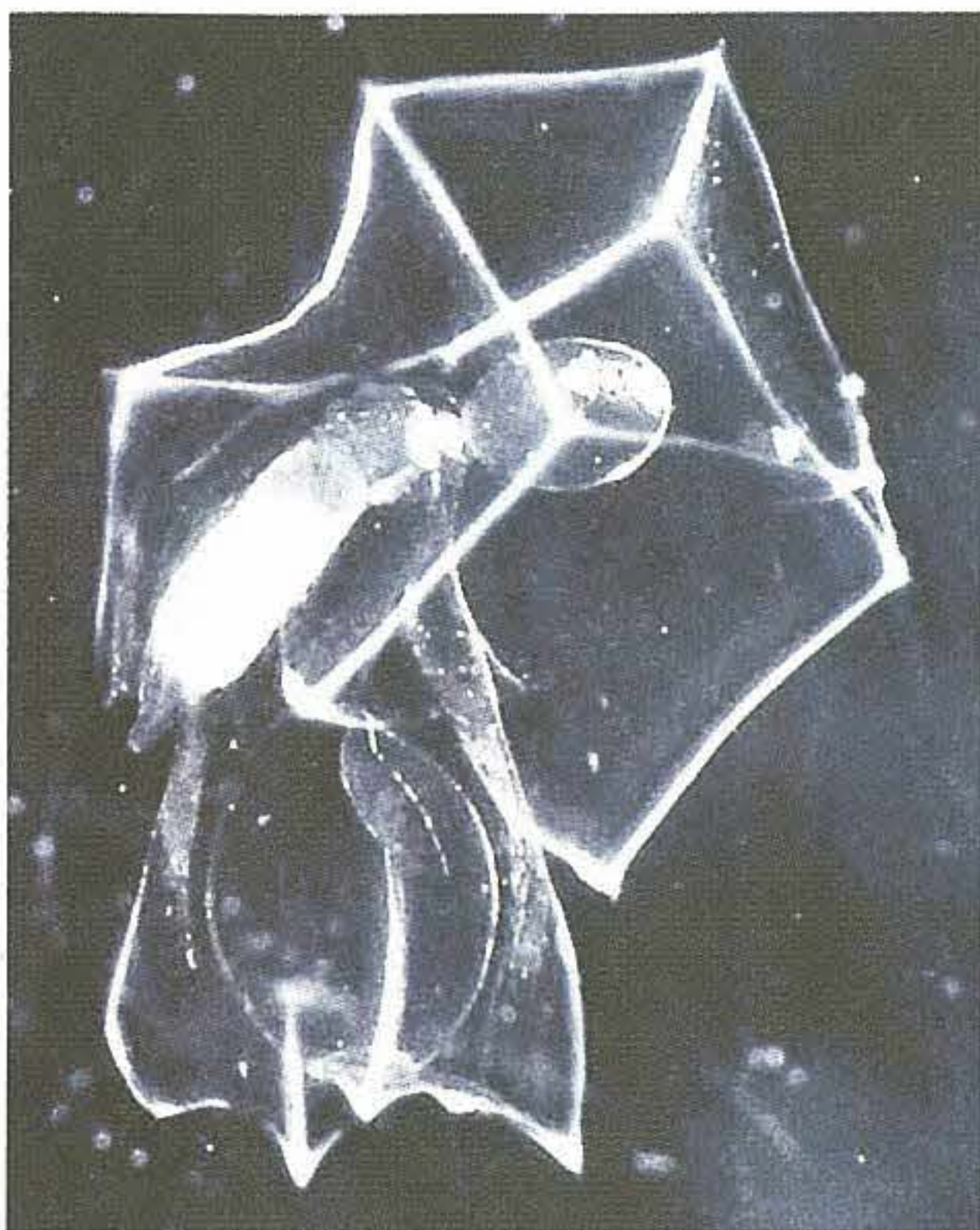


紀伊民報

トウロウクラゲ



二つのパーツが連結したトウロウクラゲ。下は生殖用

久保田 信

63



トウロウクラゲは管クラゲの一種で、外見が灯籠に似ていることから、この和名が付けられた。上下二つのパーツを連結した姿をしているが、野外から採集された個体はほとんどがバラバラになっている

る。上下のパーツは、とても堅いゼラチン質で覆われており、手荒に扱っても壊れない。外洋でプラントネットを長くひいても、薬品で固定しても、形がぜんぜん崩れない。トウロウクラゲの上部は下部を守る役割を果たし、保護葉と呼ばれる。透き通った箱形の堅い枠の中に、柔らかに伸縮できる本体が収納されている。しかし、このパーツは体に栄養を送る単なる管で、餌を捕らないし、食べもしない。大事なのは下部のパーツである。ここは生殖体と呼ばれる。

れ、配偶子が形成される所だ。画像の生殖体には、まだ配偶子はできていない。

この二段構えの生殖クラゲ(ユードキシッド)、実は大きさが2倍ある母体クラゲから作り出されたものの一つなのである。つまり、無性生殖で発生した大きな母体から、有性生殖のために無数の生殖クラゲが遊離されるのだ。

母体も灯籠形で生殖クラゲと類似するが、細かく見ると異なっている。母体には獲物を食べる口や胃袋がある部分が多く連結している。幹群と呼ぶ部分を釣り糸のように長く伸ばし、強力な刺胞で他の小さな動物を射止めて食べ、寿命が尽きるまで生きる。

どちらのクラゲも人工飼育がとても難しく、生活史は明らかにされていない。雌雄の生殖クラゲが広い大海で出会って、精子と卵を出し合って受精卵をつくり、それがうまく成長して子孫が誕生するのだろつが、その実態は謎である。

(京都大学准教授)